



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	古典入門期の指導：中学校における漢詩・漢文の指導(個人研究・共同研究)
Author(s)	鈴木, 健一
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 36: 97-106
Issue Date	2009-06-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/105234
Publisher	東京学芸大学附属学校研究会
Rights	

古典入門期の指導

— 中学校における漢詩・漢文の指導 —

東京学芸大学附属竹早中学校 鈴木 健一

目 次

1. はじめに	98
1. 1 古典学習の位置づけ	98
1. 2 入門期の取り扱い	98
1. 3 入門期の漢詩・漢文教材	99
2. 現状と課題	100
2. 1 生徒の意識・認識	100
2. 1. 1 小学校での古典の学習	100
2. 1. 2 実態調査	100
2. 2 生徒の姿	101
3. 学習指導の実践	101
3. 1 ねらい	101
3. 2 実践	102
3. 2. 1 故事成語の学習 - 1年生	102
3. 2. 2 『論語』の学習 - 2年生	103
3. 2. 3 漢詩の学習 - 3年生	105
4. 指導を終えて	106
4. 1 成果	106
4. 2 課題	106
引用・参考文献	106

古典入門期の指導

— 中学校における漢詩・漢文の指導 —

東京学芸大学附属竹早中学校 鈴木 健 一

1. はじめに

新指導要領では「伝統的な言語文化に関する事項」が設定された。古典教育が見直されて小学校低学年から導入されることになった。この改訂を受けてすでに小学校での古典の授業の提案が数多くなされている¹⁾が、これらに学びつつ9年間を見通した指導のあり方・配分などを考えていかななくてはならない。

本稿では、現状での中学校における古典教育を、特に漢詩・漢文の指導に限定して考えた。古典教材や中学生の実情をとらえ、古典学習の目標を達成するにはどうすべきかを実践を通して明らかにしておくことで、今後の小中一貫した指導を構想できると考えている。

キーワード：言語文化 古典教育 漢詩・漢文の指導

1. 1 古典学習の位置づけ

戦後の国語学習は、22年度（試案）学習指導要領国語科編において「中学校の国語教育は、小学校六か年の基礎のうえにたつということから、程度の高いものになりがちであるが、日常生活のことばからはなれないように指導することがたいせつである。その意味からも中学校の国語教育は、古典の教育から解放されなければならない。また、特殊な趣味養成としての文学教育に終わってもいけない。²⁾」とされスタートした。また、文学の学習指導上注意すべき点として、「いままでは、文学の学習において、現代よりもとかく古典を主にし、ごくわずかの作品をあまりに分析的にとり扱ったために、生徒の興味をそぎ、文学のめばえを局限するきらいがないでもなかった。次に、指導上注意しなければならないことを列挙する。（一）現代のものを主にし、ごくわずかの古典を加える。（以下略）³⁾」と述べられていた。

このような反省から始められた戦後の古典教育について、吉田裕久氏は「戦後の古典教育は、「古典からの解放」⇒「古典の見直し」（「古典に関心を持つ」・「古典に親しむ」・「文語調に慣れ、親しむ」）⇒「古典の充実」（「昔の人の見方・感じ方を知る」）という変遷をたどってきたのである。⁴⁾」と述べている。

1. 2 入門期の取り扱い

古典の学習は、中学校では入門期と位置づけられ、「我が国の文化と伝統を尊重し、生涯にわたって古典に親しむ態度の育成」を目指している。古典のもつリズムを味わい、現代にも通じる人情や真理を読みとって、古典に親しみを持てるようにしていくことが求められているのである。

リズムを味わうことは、しっかり声を出して繰り返し音読や朗読をすることで実現できる。さらに文字を目で追う読みを超えた段階「暗誦」で、より確かなものになる。漢詩・漢文の読みは原文ではなく書き下し文を用いることになるが、日本語式の読みであっても、その中に含まれている音読みをする漢語、対句や押韻などの技法が、ふだんにしたり声にしたりしている詩や文章との違いを明確にしてくれる。

この時期に扱う教材は、現行学習指導要領では「古典に関心をもたせるように書いた文章、易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章など」と示されている。

では、古典に関心を持たせるにはどうすればよいか。規工川佑輔氏は、四つの基本的指導法を挙げているが、その中のひとつ「(C) 古典との対話を主体とする指導法」として次のように述べている。

「要するに、問題意識や課題を持って古典の読みを深めることである。生徒みずからの主体的学習態度を形成

してやり、古典の世界に表れているものの見方や考え方、感じ方に積極的に反応することである。それは共鳴・共感という形で作用することであろうし、反発・批判という形で作用する場合もある。古典という世界のなかから生徒が捉え得るものは鋭い感受性であり、人間性に富む考え方である。現代にはすでにないものが古典の世界にあることも事実だし、古典の世界にある考えが今もって相通じている場合も少なくない。そのことに気づくことは関心を深めることになる。5)

1. 3 入門期の漢詩・漢文教材

中学生に用意されている漢詩・漢文の教材は、現行の教科書によると、以下の通りである。

【表1】 現行の教科書に収められている漢詩・漢文教材一覧

	G 社	K 社	M 社	S 社	T 社
1年	故事成語 (漢文) 五十歩百歩 矛盾 *調べよう 「助長」「漁夫の利」「出盡の譽れ」「蛇足」「断腸の思い」	矛盾 *データベースコラム 故事成語と名句・名言 「背水の陣」「完璧」「杜撰」	今に生きる言葉 矛盾 *調べてみよう 「推敲」「五十歩百歩」「背水の陣」「蛇足」	矛盾 故事成語 *確かめておこう 「漁夫の利」「蜚雪の功」「四面楚歌」「朝三暮四」「大器晩成」「背水の陣」「呉越同舟」「塞翁が馬」「杞憂」「覆水盆に返らず」「画竜点睛」「逆鱗に触れる」「助長」「登竜門」「馬耳東風」「良薬は口に苦し」「傍若無人」	矛盾 *紹介 「推敲」「五十歩百歩」「漁夫の利」「呉越同舟」「蛇足」「杞憂」
2年	論語 ・子曰「吾十有五而志于学。…」 ・子曰「学而不思則罔…」 ・子曰「由誨女知之乎…」 ・子貢問曰「有一言而可以終身…」	孔子の言葉 一 論語 ・徳不孤。必有隣。 ・己所不欲、勿施於人。 ・学而時習之、不亦説乎。有朋…	漢詩の風景 「春曉」 「絶句」 「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」	漢詩の世界 「春曉」 「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」 「春望」	論語 ・子曰「温故而知新…」 ・子曰「学而不思則罔…」 ・子曰「君子求諸己、小人求諸人。」
3年	漢詩 「春望」 「元二の安西に使ひするを送る」 「静夜の思ひ」	詩歌の味わい 「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」 「春望」	学んで時にこれを習ふ 一 「論語」から一 ・子曰「学而時習之、…」 ・子曰「温故而知新…」 ・子曰「学而不思則罔…」 ・子曰「己所不欲…」	孔子のことば「論語」より ・子曰「吾十有五而志于学。三十…」 ・子曰「学而不思則罔…」 ・子曰「過而不改…」	漢詩二編 「春望」 「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」

これを見てわかるように、採り上げられている教材は、故事成語、論語、漢詩である。1年生では故事成語を学習するというのは各社共通であり、論語と漢詩は教科書によって配当学年が異なっているが、3年間通して見れば、どの教科書も変わらないと言える。

教材の内容はどうであろうか。10年前の平成9年版と見比べてみる。

【表2】 平成9年版の教科書に収められている漢詩・漢文教材一覧

	G 社	K 社	M 社	S 社	T 社
1年	故事成語 五十歩百歩 矛盾 *調べよう 「推敲」「蛇足」「蜚雪の功」	中国の故事 蛇足 矛盾 *調べよう 「五十歩百歩」「漁夫の利」「蜚雪の功」「株を守る」「虎の威を借る狐」「推敲」	故事から生まれた言葉 (一) 推敲 (二) 矛盾 *調べてみよう 「五十歩百歩」「蛇足」「漁夫の利」	故事成語一守株・矛盾 *調べ、発表し合おう 「蛇足」「推敲」「漁夫の利」「蜚雪の功」「五十歩百歩」	矛盾 一「韓非子」より *調べよう 「蛇足」「推敲」「杞憂」「呉越同舟」
2年	学んで時に之を習ふ(論語) ・子曰「学而時習之…」 ・子曰「吾十有五而志于学。三十…」 ・子貢問曰「有一言而可以終身…」	桃花源 *調べよう 「五十歩百歩」「漁夫の利」「蜚雪の功」「株を守る」「虎の威を借る狐」「推敲」	漢詩の風景 「春曉」 「絶句」 「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」 「桂林莊雜詠 諸生に示す」	虎の威を借る狐 虎の威を借る狐一戦国策 孔子のことば一論語 ・子曰「過而不改…」 ・子曰「学而不思則罔…」 ・子夏曰「子退朝曰「傷人呼…」」	朋有り遠方よりきたる… 「論語」より 「学而時習之…」 「温故而知新…」 「学而不思則罔…」
3年	春望一中国の詩 「春望」 「独り敬亭山に坐す」 「元二の安西に使ひするを送る」	中国の詩 「春曉」 「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」 「春望」	学んで時にこれを習ふ (「論語」から) ・子曰「学而時習之、…」 ・子曰「学而不思則罔…」 ・子曰「己所不欲…」 ・子夏為 父寧、問政。…	黄鶴楼にて一漢詩 「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」 「春望」	漢詩二編…李白/杜甫 「廬山の瀑布を望む」 「春望」

この10年間で大きな変化は認められない。9年版では漢文の教材を論語以外の文章から採っている教科書が2例あったが、現行版ではなくなっていることが変化と言える程度である。

さらに10年遡って、昭和62年版のT社の教科書を例にして見てみると、1年生で故事成語「矛盾」、2年生で論語「学而時習之…」「温故而知新…」「学而不思則罔…」、3年生で漢詩二編「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」「春望」となっている。現行版とほとんど変わらず、論語の内容が少し異なっている程度である。ただし、もっと遡れば、T社の昭和51年版の2年生の教科書を例にすると、「5 古典を読む（「鷹の虫」「足切り八助」「孔子のことば）」、「13 古典に親しむ（「つれづれ草」「扇の的）」と、古典の単元が二つあり教材も多かった時期もある。

教材の内容があまり変わらないということは、マンネリ化しているという批判があるとともに、一方で、安定した学習価値の高いものが残っていると評価することもできよう。

2. 現状と課題

2. 1 生徒の意識・認識

2. 1. 1 小学校での古典の学習

現在の中学生は、小学校での古典の学習体験をほとんど持っていない。M社の小学校国語教科書を例に古典の教材を探してみると、狂言『柿山伏』が6年生で採り上げられているくらいである。古典ではないが、古典の学習に結びつく内容を扱っているものを探すと、5年生に言葉の種類を学ぶ教材「和語・漢語・外来語」があり、それぞれの特徴が説明されている。また、6年生には漢字の熟語の組み立てを学ぶ教材「熟語の成り立ち」があり、ここでは、二字の熟語の上下の漢字がどういう関係になっているかを考えさせている。

他教科では、K社の5年生の音楽の教科書に「待ちぼうけ」が載っている。

2. 1. 2 実態調査

本紀要の第35集に、東京学芸大学附属国際中等教育学校の1年生104名を対象に調査したことが報告されている。その中から漢詩・漢文に関わる部分を引用させていただく。

2 中学生になる前に、次の作品や人物・言葉について知っていましたか。

(ア～シは省略) ス 史記 セ 三国志 ソ 項羽と劉邦 タ 劉備・関羽・張飛・孔明 チ 論語
ツ 孔子 テ 杜甫 ト 李白 ナ 矛盾 ニ 五十歩百歩 ヌ 蛇足 ネ 推敲 ノ 覆水盆に返らず
ハ 四面楚歌 ヒ 守株(株を守る) フ 桃花源記

という調査をし、結果については、

「(前略) ゲームや漫画になっているものも多いはずの漢文の関連項目については、知っているという回答は少なかった。⁶⁾」

とまとめられている。

本校の生徒に対しても調査を行った。1年生158名を対象に、漢詩二編と故事成語十個を示して、漢詩の印象を尋ね、故事成語はその理解度を調査した。

漢詩は「春暁」と「春望」を白文で示し、感じたことや思ったことを自由に記述させた。形式にも内容にも全く触れていない段階なので、第一印象とっていいものだが、書かれたものを見てみると、生徒の抱いた印象は総じて悪い。

「何だこれはという感じ」「外国語みたい」「お経っぽい」「見てると目が回ってくる」という印象を持ち、少し関心を持って「読み方はあるの？訓読みで読むのかな？」「よくわからないが、もしかしたら、これは五字熟語なのかもしれない」などと考え、一歩迫ろうとはするが、「読めない」「漢字ばかりで意味が分からない」と、はね返されてしまっている。

故事成語は、教科書で解説されていたり発展学習として示されているものを中心に十個示し、読みと意味を記述させた。結果を整理すると、次ページの表のようになる。

【表3】 故事成語の理解（読み方・意味）

記号の意味 正しく読める：◎、 正しい意味を答えている：◎
 まちがって読んでいる：△、 まちがった意味を答えている：△
 読みを知らない：×、 意味を知らない：×
 例 (◎・◎) = 正しく読めており、正しい意味を答えている。

() 内の数値は、全158名に対する割合。

	◎・◎	◎・△	◎・×	△・◎	△・△	△・×	×・◎	×・△	△・×
①五十歩百歩	112 (70.9)	12 (7.6)	24 (15.2)	1 (0.6)	0	5 (3.2)	0	0	4 (2.5)
②推敲	18 (11.4)	10 (6.3)	37 (23.4)	0	4 (2.5)	14 (8.9)	0	0	75 (47.5)
③蛇足	46 (29.1)	17 (10.8)	41 (25.9)	0	9 (5.7)	18 (11.4)	0	2 (1.3)	25 (15.8)
④漁夫の利	59 (37.3)	13 (8.2)	36 (22.8)	3 (1.9)	2 (1.3)	14 (8.9)	3 (1.9)	0	28 (17.7)
⑤一炊の夢	9 (5.7)	15 (9.5)	59 (37.3)	0	5 (3.2)	11 (7.0)	0	2 (1.3)	57 (36.1)
⑥矛盾	110 (69.6)	20 (12.7)	9 (5.7)	2 (1.3)	2 (1.3)	4 (2.5)	1 (0.6)	0	10 (6.3)
⑦四面楚歌	45 (28.5)	9 (5.7)	50 (31.6)	0	2 (1.3)	19 (12.0)	0	0	33 (20.9)
⑧守株	1 (0.6)	5 (3.2)	5 (3.2)	1 (0.6)	10 (6.3)	43 (27.2)	0	1 (0.6)	92 (58.2)
⑨画竜点睛	7 (4.4)	6 (3.8)	11 (7.0)	9 (5.7)	17 (10.8)	58 (36.7)	0	0	50 (31.6)
⑩臥薪嘗胆	9 (5.7)	2 (1.3)	19 (12.0)	2 (1.3)	0	17 (10.8)	0	0	109 (69.0)

知らない言葉に出合った生徒は、何とか読もうと努力する。そして漢字として易しいものは正しく読む。その結果、読みは正しいが意味は知らないという答えが多く出てくるもの（「一炊の夢」はその例）もあった。一方、その漢字が一般的ではない読みをする場合に、読みは違っているが意味は正しいというもの（「画竜点睛」の「竜」を「りゅう」と読んでしまう例）も出てきた。どちらもその言葉を理解しているとは言い難い。今回の調査では、「正しい読みができて正しい意味が書けていれば、その語を理解している。またそういう生徒が多ければ、その語の理解度は高い」と考えた。調査の結果から、「漁夫の利」「五十歩百歩」「矛盾」はその理解度の高いグループに当たる。三分の一ほどの生徒の理解があったものは、「蛇足」「四面楚歌」、一割程度かそれ以下の理解者しかいないものは、「推敲」「一炊の夢」「守株」「画竜点睛」「臥薪嘗胆」であった。小学校の書く学習の中で「読み直してよりよい文章にする」ということをしているにもかかわらず、「推敲」が正しく読めず理解度が低かったのは意外であった。「守株」は、後に「待ちぼうけ」を話題にすると、2割ほどの生徒が反応し、音楽で歌ったり聴いたりしたと答えたが、故事成語に結びつけた学習はしていなかった。

2. 2 生徒の姿

以上のようなことからとらえられる生徒像は、同時に指導の課題でもあるが、次のようであると整理できる。

- ①漢字や漢語に対して良い印象を持っていない。
- ②小学校では古典に関わる学習をほとんどしていない。
- ③教材となる故事成語や論語、漢詩についての知識はほとんどない。

3. 学習指導の実践

3. 1 ねらい

難しい印象があり意味も予想できない漢詩・漢文。その学習に生徒が興味を持って取り組めるように、次の点に留意して構想した。

- ①学習材の検討
- ②参考資料等の活用
- ③学習形態の弾力化
- ④音読の多用
- ⑤導入（事前学習）の工夫

3. 2 実践

3. 2. 1 故事成語の学習 — 1年生

【事前学習】

学習に先立って、四字熟語について考える授業を設定した。生徒は、学校行事のキャッチフレーズを考えたり、書き初めの課題として取り組んだり、学級目標を作ったりというように、四字熟語を見たり考えたりする経験を持っていた。そこで、四字熟語を思いつくかぎり挙げ、それらの組み立てを考えて、いくつかに分けてみる作業をさせた。ここでは、小学校での学習「熟語の成り立ち」を想起させることで、

A：似た意味の熟語を組み合わせたもの … 「中途半端」「絶体絶命」など

B：反対の意味を持つ熟語を組み合わせたもの … 「弱肉強食」「右往左往」など

C：上の二字の熟語が下の二字の熟語を修飾しているもの … 「大器晩成」「自画自賛」など

の三つが容易に挙げられた。

さらに、次元が異なる「D：数字が使われているもの」が指摘されたが、その中でも「一□一△」という形の熟語に注目させた。挙げられた熟語の数字「一」を外してみるとどうなるか、という問いに、「反対の語の組み合わせができる（「一進一退」のような例）、「似たような意味の語が残る（「一言一句」のような例）」と、活発な反応を示した。

この学習により、生徒の四字熟語への関心や理解がいつそう深まり、漢字への抵抗感も薄らいだように見て取れた。

【故事成語の学習】

続いて故事成語の学習に入った。次のような流れで構成し実践した。

①「故事」「故事成語」について理解する。

以前に調査した十個の言葉は故事成語であったこと、前時の学習であげられた四字熟語の中にも故事成語が含まれていたことを告げて意識化させ、改めて「故事」とは何か、「故事成語」とはどういうものか、一般的な定義を理解させた。

②教科書に掲載されている「五十歩百歩」「矛盾」を読む。

内容については、解説文や書き下し文、現代語訳を読んで、それぞれがどういう故事なのか、それらをもとにしてどういう意味をもつ故事成語が生まれたのかを具体的に読みとらせた。

中学校における漢文学習のスタートなので、書き下し文のリズムの良さや勢いを実感させるために、範読に続けて音読させ、その後各自で繰り返し練習させ発表させた。

故事成語の辞書の意味が故事の内容と少しずれていることについては、故事成語は故事そのものではなくて、その故事の中心的なことがらや伝えたかったことからできていることを確認させた。

さらに、例文を作って発表し合うことを通して、使い方を確認し、自分たちの言語生活の中でも使えるものであること再認識させた。

③故事成語を一つ選び、グループで調べる。

四五名でグループを作り、選んだ故事成語について調べさせた。用意した故事成語は、これまでに教科書で扱われてきたものや調査で理解度の低かったものなどの中から選んだ、次の十個である。

「漁夫の利」「蜚雪の功」「守株」「人間万事塞翁が馬（「塞翁が馬」）」「推敲」「画竜点睛」「杞憂」「大器晩成」「朝三暮四」「覆水盆に返らず」

グループ学習で、共通に学習したことを踏まえて調べる項目を考えさせ、発表レヂュメを作らせた。分かりやすい工夫をすることを心掛けさせた結果、生徒たちはグループ内で話し合い協力して一枚のそれぞれに工夫された原稿を作り上げた。一例を次に挙げる。

覆水盆に返らず

~ It is no use crying over spilt milk ~

意味

① いったん離別（離婚）した夫婦はもう元に戻らないことなど。② 一度やってしまったことは、もう取り返しのつかないということ。

例文

・エーミーのやままゆがをつぶした僕は、覆水盆に返らずの気分だった。
・「覆水盆に返らず」だからね。よく考えることだよ。

故事

覆水盆に返らず

覆水定難、收

周の呂尚の妻は、呂尚が読書にふり向きを封爵、馬車、馬車、馬車。太公取水一盆、覆于地、令福收。惟得糞泥。太公曰、若能離更合、覆水定難收。

☆登場人物

・呂尚（太公）周代の斉国の始祖
・呂尚の妻

☆出典

拾遺記：しゅういぎ

時代背景

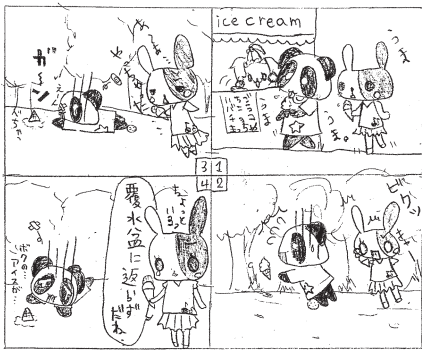
A101 このことわざはいつ作られた？
周の時代で、この時代は、中国の古代王朝の一つ。（紀元前千百年頃、紀元前二百五十六年まで）

A2 呂尚はどんな人？
太公望の本名で、周の時代の斉国の始祖。

類似語

・落花枝に返らず、破鏡再び照らさず。
・覆水口定めて收め難し。

メンバー



④ 発表し合い、理解を深める。

順に前に出て、発表させた。発表 → 質問と答え → 感想記入 → 補足・講評、という形で進めた。各グループはレジュメや発表の仕方を工夫し、和やかに進めていた。聞く側も、質問したり感想を記入することで、仲間のグループの発表に学ぼうという姿勢が見られた。

「故事成語を調べよう」 D組 1番	◆発表者に感謝の意を込めてメッセージを書こう。 9 班 覆水盆に返らず	◎ここがすばらしかった（参考になった） 例文のところで前に予習したものと使ったからわかりやすい。	▽ここすばらばもつとよくなったと思われる 読むところを書きいってほしかった。 言葉がちゃんと難しかった。
----------------------	---	---	--

「故事成語を調べよう」 D組 1番	◆発表者に感謝の意を込めてメッセージを書こう。 9 班 覆水盆に返らず	◎ここがすばらしかった（参考になった） 4コママンガが上手でわかりやすい 字がきれい プリントの構成がいい。	▽ここすばらばもつとよくなったと思われる もっとハキハキ話すといいと思います。
----------------------	---	---	--

3. 2. 2 『論語』の学習 - 2年生

【事前学習】

『論語』の学習に入る前に、生活の中に生きている言葉として見聞きする可能性のある「不惑」「温故知新」を提示した。それぞれの読みと意味を確認した。

次に、漢語と和語という既習内容を想起させ、この二語の意味を和語に置き換える形で考えることにした。その結果「不惑」は「惑わ不（ず）」、「温故知新」は「故きを温ね新しきを知る」となり、生徒は漢字を読む

順番が違っていることに気づいた。

続いて語順の違いについて考えさせた。「わたしは うたを うたう」という表現を例に比較した。

(日本語) わたしは うたを うたう

(英語) I sing songs

(中国語) 我 唱 歌

だれが の位置は同じだが、なにを、どうする は日本語と英語は違っていたことを確認し、中国語の場合も英語と同じ形になっていることに気づかせた。英語を日本語に訳すときには日本語の順番にしていたことを中国語にもあてはめて考えると、漢字を読む順番が変わることが確認できた。これを受けて訓読の練習をさせた。練習は問題形式で、初回は訓点にしたがって読む順番に並べ替える問題、二回目では読む順番に訓点をつける問題及び書き下し文を参考に原文を訓読する問題を出した。徐々に難度を上げて配列したが、かなり興味を持って取り組み、生徒同士で教え合う姿も見られた。

国語学習プリント (種) 組 番
 〆 訓読の練習 〷 第二回
 〇 数字の順番に読めるように送り点をつけてみよう。

ヌ、 勿以患小為之 (患の小なるを以て之を為すこと勿かれ)	セ、 項羽欲東渡烏江 (項羽東のかた烏江を渡らんと欲す)	ス、 人生多憂苦 (人生憂苦多し)	シ、 人不学不知道 (人学ばざれば道を知らず)	サ、 黄河入海流 (黄河海に入りて流る)	〇 書き下し文を手がかりにして送り点と送り音をつけよう。				
コ ① ⑬ ② ⑪ ⑤ ④ ③ ⑩ ⑥ ⑦ ⑨ ⑧ ⑫ ⑭	ケ ① ④ ③ ② ⑧ ⑤ ⑦ ⑥ ⑪ ⑨ ⑩	ク ⑫ ① ⑨ ② ③ ⑧ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑩ ⑪	キ ⑪ ① ② ③ ⑩ ④ ⑥ ⑤ ⑧ ⑦ ⑨	カ ① ⑤ ② ③ ④ ⑩ ⑥ ⑧ ⑦ ⑨	オ ① ② ④ ③ ⑤ ⑨ ⑥ ⑦ ⑧	エ ⑥ ① ② ④ ③ ⑤ ⑦ ⑧	ウ ① ⑦ ② ③ ④ ⑤ ⑥	イ ① ③ ② ④ ⑥ ⑤	一 ① ② ⑤ ④ ③

【論語の学習】

①『論語』について知る。

先に調べた「不惑」「温故知新」の出典が『論語』であったことを確認し、さらに指導者の自己紹介カードや学年便りの文章中に「過而不改、是謂過矣」と書いてあったこと思いださせ、これもまた『論語』の中にあることを紹介して関心を持たせた。

②四つの言葉を読む。

教科書に載せられている四つの言葉の書き下し文を繰り返し音読させた。

③四つの言葉の内容をとらえる。

小タイトル「成長と共に」「深まる心」「行動する心」と結びつけながら、それぞれの言葉の意味を考えさせた。

④四つの言葉の現代的意味を考える。

それぞれの言葉はどういう状況の人に言っているものかを考えさせ、孔子の考え方や伝えようとしていることを吟味することを通して、現代にもあてはまる生きた言葉であることに気づかせた。

3. 2. 3 漢詩の学習 — 3年生

漢詩の学習指導については、以前に漢字・漢語の指導と組み合わせた実践の報告をしている⁸⁾が、その時の成果も採り入れながら今回の指導を組み立てた。

【事前学習】

きっかけは学校長の講話であった。生徒に向けた話の中で、時間を大切にという意味から「少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず」の二句を引用されたのである。

これを使わせていただいて、誰の何という詩か、残りの部分はどうなっているのか、白文ではどうなるか、一時間の学習を設定した。作者は朱熹と紹介しても反応がなかったが、朱子学の朱子のことだと言うとうなづく生徒が多く出た。題名「偶成」とその意味を確認後、白文で全体を示した。書き下し文の範読をし、訓点を施した後に一行ずつ範読と一斉音読を繰り返し、読みを確認した。用語の意味を解説し、作者の思い・主張をとらえた。

【漢詩の学習】

漢詩の指導でまず意図したのは、次の二点

A：詩の形式（絶句と律詩があること、それぞれ一行が五文字のものと七文字のものがあること）

B：二大詩人（李白と杜甫）

を押さえることであり、そのうえで、対句や押韻の表現技法、詩にうたわれた情景、込められている作者の心情などの理解を進めたいと考えたのである。

教材として選んだのは、次の三編の詩である。

「絶句」(杜甫) … 色彩表現、対句、押韻、作者の心情を考えるのにふさわしい。五言絶句。

「贈汪倫」(李白) … 情景を想像したり李白の人物像に迫りやすい。七言絶句。

「春望」(杜甫) … 対句、押韻、作者の心情を考えるのにふさわしい。後掲の「おくのほそ道」とも関連する。七言律詩。

それぞれ一枚のプリントを用意し、白文に返り点のみ付けたものを示した。同時に、語意、句意、形式、押韻をまとめたり指摘したりできるようにしておいた。また、参考になることがらについても、併せて載せておいた。

① 「絶句」を読む。

- ・一カ所あるレ点を意識させ、書き下し文の範読を聴かせた後、声を出して練習させる。
- ・語句の意味をとらえさせ、全体の内容をつかませる。
- ・前半の情景、後半の作者の置かれている状況や心情を関連づけて理解させる。
- ・形式（五言絶句）、押韻（然と年）、対句（起句と承句が同じ構造になっている）を理解させる。
- ・『鶯の卵』に所収の詩⁸⁾と比べてみさせる。

② 「贈汪倫」を読む。

- ・返り点を意識させ、書き下し文の範読を聴かせた後、声を出して練習させる。
- ・語意・句意をとらえさせ、全体の内容をつかむ。特に、「舟」や「忽」「聞」の漢字の持つ意味を英訳文⁹⁾を手がかりにとらえさせる。

A PARTING GIFT TO WANG LAN

BY LI T'AI-PO

Li Po gets into a small boat—he is on the point of starting.

Suddenly he hears footsteps on the bank and the sound of singing.

The Peach-Flower Pool is a thousand feet deep,

Yet it is not greater than the emotion of Wang Lan as he takes leave of me

Fir-Flower Tablets, p. 99

- ・詩の中の人物「汪倫」が酒造りの名人であり、李白はお酒をこよなく愛した人物であることを知らせ、二人の関わりや詩の情景を想像させる。
- ・形式（七言絶句）、押韻（行、声、情）を理解させる。

③「春望」を読む。

- ・返り点を意識させ、書き下し文の範読を聴かせた後、声を出して練習させる。
- ・語意、句意をとらえさせ、全体の内容をつかませる。
- ・杜甫の置かれている状況を既習の「絶句」と照らし合わせてとらえさせ、心情を想像させる。
- ・形式（五言律詩）、対句（第一句と第二句（首聯）、第三句と第四句（頷聯）、第五句と第六句（頸聯））、押韻（深、心、金、簪）を理解させる。

4. 指導を終えて

4. 1 成果

3年間の国語学習をふりかえって、生徒の中には、故事成語の発表学習や漢詩の学習が特に印象に残った、良かった、イメージが変わったと答えた者が何人もいた。このことは、何よりの励ましである。漢詩・漢文の学習を、次のような形で構想し実践した成果であると考えられる。

- ①音読・朗読・暗誦を重視し、大きくはっきりと声を出し、声を聴き合う活動を多く組み入れたこと。
- ②導入段階で、身近なことがらと関連づけたり、小学校での学習内容を持ち込んだり、ゲームの要素を採り入れた学習材を作成したりなどして、興味づけを行ったこと。
- ③在籍している中国語のできる生徒に読んでもらったり、録音教材や解釈の助けとなる資料を積極的に導入したこと。
- ④グループでの共同作業、発表レジュメの印刷・配付など、取り組みやすく相手に理解してもらいやすくなる活動を採り入れたこと。

4. 2 課題

教材そのものが持つ事情や、中学生の実情を考えながら、いくつかの工夫を盛り込んだ学習を構想し実践した。その結果、ハードルは低くなり、興味深く学習に参加してくる生徒の姿が見られた。ただ、今回の実践は、言われていることを再確認したようなものである。さらに、中学校段階だけの漢詩・漢文の指導のあり方を考えたものでもある。新指導要領の求める小学校中学校あわせて9年間の古典教育をどうするか、手がかりとなることも得られたので、児童生徒の発達段階を考慮しつつ、教材の内容や指導の方法を考えていく必要を強く感じている。

引用・参考文献

- 1) 例えば、廣川加代子「漢詩の魅力に出会わせる工夫」教育科学国語教育 No.696 pp.60-63 2008
庭田瑞穂「論語を読むことで言語文化に親しむ古典の授業」同上書 pp.64-67
- 2)、3) 『昭和22年度（試案）学習指導要領 国語科編』 pp.96、pp.136-137 文部省 1947
- 4) 吉田裕久「学習指導要領に見る戦後古典教育観の変遷」前掲書1) pp.7
- 5) 規工川佑輔『魅力ある古典の指導入門』 pp.30 明治図書 1991
- 6) 大熊徹ほか「国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究」東京学芸大学附属学校研究紀要 第35集 pp.24-25 2008
- 7) 鈴木健一「楽しく漢詩の学習に取り組ませる指導」東京学芸大学附属竹早中学校研究紀要 第26号 1986
- 8) 土岐善磨『鶯の卵』筑摩書房 1985第1刷
- 9) 吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』 pp.86に紹介されている 岩波書店 1971第37刷